

NHK『道徳ドキュメント』の制作に関わって

福井 徹

要約 本稿では、教科番組『道徳ドキュメント』の制作の経緯とねらい、学校現場における反響や学習教材としての課題について、制作者の立場から述べている。番組作りに際しては、「子どもたちに考えさせる」こと、子どもたちの気持ちを「ざわつかせる」内容にすることを心がけている。また、「人の生き様」をテーマにすることで、子どもたちの自己肯定感を高めることも意図して、番組作りを進めている。

1 NHK『道徳ドキュメント』の概略

私は『道徳ドキュメント』という番組に、プロデューサーとしてかかわってきた。NHKでは30～40年ぐらい前から、学校教育に対応する教科番組がある。しかしテレビを見せることに拒否反応が、先生にもあったり、保護者の方にも一時期すごく強かったという話を聞いた。つまり、「子どもたちは放っておいても家でテレビをよく見るのに、なぜ学校に行ってもテレビを見せるのか。これは教師がサボっているのではないか」という考え方である。

道徳番組は古くからあり、現在は、小学校1・2年用として『ざわざわ森のがんこちゃん』（人形劇）、3・4年生では『時々迷々』（ドラマ）を放映している。『時々迷々』は、実際に子どもが出てきて、学校で起きるいろいろな出来事で迷うというドラマである。5・6年生は、2006年までは『虹色定期便』（ドラマ）を放映していた。その前は『さわやか3組』という番組がだいぶ長く続いた。そして2007年から、初めてドキュメンタリーで道徳教科の番組を作ることになった。それが『道徳ドキュメント』である。なぜドキュメンタリーかというと、教育

現場で『虹色定期便』がなかなか使ってもらえなくなってきたからである。その大きな理由の一つが、子どもたちのテレビを見る目が肥えてきていることである。例えば、「友情」というテーマの時は、最初にだいたい些細なことでケンカをする、それがいろいろあって仲直りするという流れのことが多い。5・6年ぐらいになると、最初のケンカの場面を見た時点で「あ、この二人は仲直りする」という感じで、終わり3分前ぐらいになると「良い話になってくるぞ」という感じでオチを読んでしまう。今のテレビドラマは複雑にできているから、「NHK教育テレビのドラマなんかバカくさくて観てられない」ということである。

しかしドラマを複雑にしてしまうと、時間内の15分で道徳的な内容を含んだストーリーが終わらない。また人間関係が複雑になると、前回分を観ていないとストーリーがわからないという問題も起きる。そうしたことを検討した結果、2006年でドラマはやめ、「事実を見せて、道徳を考えてもらうことのほうが良いのではないか」ということになった。実際に子どもたちの周りにもいじめなどのいろいろな問題が起き、大人たちの深刻なニュースもテレビやネッ

表1 2013年度 放送リスト&内容項目対照表

	[1]自分自身						[2]他者とのかわり					[3]自然や崇高			[4]集団や社会							
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8
1 学期																						
人とつながる																						
人生はチャレンジだ																						
キミならどうする？																						
人とつながる																						
人生はチャレンジだ																						
キミならどうする？																						
人とつながる																						
2 学期																						
人とつながる																						
キミならどうする？																						
人とつながる																						
キミならどうする？																						
キミならどうする？																						
キミならどうする？																						
人生はチャレンジだ																						
人とつながる																						

トで目にするので、そういう事実を正面から取り上げたらどうかということでドキュメンタリー番組を始めた。

番組は年間20本近く制作して観てもらっているが、道徳なので、学校によって活用の仕方が全然違う。そこで、ネット上でも動画配信して、どの回をどの順で観ていただいてもよいように一本一本別々のテーマで作っている(表1を参照)。

番組内容を具体的に知ってもらうために、2011年度に放送された「ほくの国 わたしの国」について紹介したい。今回は、「横浜市にあるいちょう小学校は、全校児童の3分の2が中国などの外国にルーツをもっている。インドシナ難民の定住促進センターができたことで生まれた『多国籍小学校』を舞台に、日本で学ぶ外国の子どもたちが何に悩み、何を夢見ているのかを描く」という内容のドキュメンタリーである。それまでのドラマのように、「友情」とか「いじめ」、あるいは「公共心を大切にしよう」といった一つ一つのねらいははっきりしていない。ただこの「ほくの国 わたしの国」は子どもたちが主人公ということもあり、最後は少し結論的

なことを示したが、基本的には結論を誘導しないようにしている番組が多い。「オープンエンド」と私たちは言っているが、「解決できません」「困りました」みたいな感じで終わる番組が全体の半分ぐらいある。

番組『道徳ドキュメント』は15分でまとめており、授業の残りの時間はこれを題材にいろいろな形で組み立ててもらえればということで、先生にお任せするというスタイルをとっている。しかし何らかのサポートがないと、どうやって使っていいのか分からないと言われることが多いので、番組HPで毎回一つの授業案を出している。これは千葉の道徳教育に長く関わられ、今は校長になられている土田雄一先生に「自分が使うならこういうねらいをもって実践する」ということで、あくまでも一案として毎回書いていただいている。

この「ほくの国 わたしの国」の場合、外国にルーツのある子どもにどんな悩みがあるのかを考えながら観ようということで、まずドキュメンタリーを観させて、「①心に残ったところはどこですか」という問いかけをし、続いて「②そこに出てくる外国にルーツを持つ佐藤さんや

渡辺さんにはどんな悩みがあって、それをどう解決しようとしたか」という振り返りをし、「③外国にルーツを持つ子どもにはどんな悩みがあるのか」ということで一般化をし、「④今後、自分ならこれらの人たちとどう付き合っていくといいのか」を考え、「⑤最後はワークシートにまとめる」という構成になっている。

土田雄一先生がいらっしゃる千葉県は、日系ブラジル人はいるものの、中国系の人はあまりいない。そのため、佐藤さんや渡辺さんのような中国系の方々の悩みがわかりにくいので、「あ、こんなことがあるんだね」という“気付き”に重きをおいて授業案が考えられている。このように地域やクラスの状態によって違いが出てくると思うので、番組としては授業案を一つに絞ることはせず、あくまで一案として出している。

学校の先生は非常に忙しく、授業を作る際には、教科書と副読本に基づいて指導案を作っているので、それを基本的に実践していくというスタイルの先生が少なくない。そこで、磁石で貼れるような写真やあらすじも、HPで用意して、できるだけ先生が使ってみようという気持ちになりやすいような工夫をしている。

2 番組制作のねらいと苦勞

次に、番組制作のねらいと苦勞している部分をお話したい。製作のねらい、苦勞という点では、ドラマからドキュメンタリーに思い切って変えたことから起こることである。ドラマだと、学習指導要領にある道徳の内容項目に特化した内容として制作できるが、ドキュメンタリーとなるとさまざまな制約が出てくる。例えば、「ぼくの国 わたしの国」の場合、学習指導要領の「4 - (8) 国際理解・親善」を基礎にしているが、ドキュメンタリー制作の際には、

佐藤さんや渡辺さんは実際に出てもらえたが、当然ながら出たくないという人も多くいたし、いちよう小学校は取材に応じていただけたが、何校かは断られたりもした。「一人の子どもを主人公にすることが納得できない」という校長もいた。このようなさまざまな制約を受けた上で、番組内容は成立している。

また、子どもの家庭事情に細かく触れれば触れるほど個別の話になり、日本全体としてはどうなのかとか、学習指導要領の「日本人としての自覚を持って世界の人々への親善に努める」という点に合っているのかどうかということなど、必ずしも「This is 国際理解・親善」という番組はなかなか作れない面がある。しかしドキュメンタリーとして制作すると決めた以上は、道徳の内容項目「国際理解・親善」に特化することを最優先するよりは、「いちよう小学校の2011年の撮影の中で、何が起きたのか」「取材中どういう悩みをもった子どもがいるのか」など、事実から離れないようにして丁寧なまとめ、後は教室で子どもたちに考えてもらおうというスタンスで悩みながら番組を作っている。一方で、ドキュメンタリーが持つ力もあると思っている。それを活かすため、できるだけその年に起きた個別具体的な出来事を取り上げている。それを子どもたちの心の中で普遍化していくことは、学校の教室でやっていただけないかと考えている。これは明らかにこれまでの道徳教材とは異なるし、これまでの道徳のやり方とは違う面があると思いつつも、番組作りをしている。

ただドキュメンタリーと言ってもいろいろあり、私たちが気を付けていることが2点ある。一つは、当然だが、子どもたちに考えさせるものにしようと思っている。ただ、この辺のさじ加減が難しい。難しすぎても「もう難しいや」と考えることを止めてしまう。身近なもので、

かつ考えさせるということなので、「どっちかな、どうなのかな」とちょっと子どもが内心ザワつく感じを、私は子どもの「心に波紋を起こす」という言い方をしている。理想としては、15分の番組を観た後で子どもたちの自主的な議論が30分ぐらい盛り上がる授業になると良いなと思っている。

二つ目は、少し重なるが、自分の意見が言いたくなる授業の発火点になるようなものにしたと思っている。ドキュメンタリーの中で少しおかしなことを言う人が出てきたり、反論があったり、やろうと思ったことがうまくいかなかったりというようなこともできるだけ織り込んでいけたらと思っている。

最近、小学校でも議論・思考する力を養うことが重視され、「総合的な学習の時間」に『道徳ドキュメント』を教材として使っている先生もいるという。不法投棄を扱った回、「どうしてゴミをすてるの？」では、一生懸命ゴミを片づけようとする市の職員に焦点を当て、「実際どうしてこんなに片付けているのにゴミを捨てるのか」という現状を示し、「どうすればゴミは片付くのか」を問いかけるという構成になっている。その他に比較的よく教材として用いられているのが、「優先席の話」である。そもそも「なぜ優先席があるのか」を考えると、優先しない人がいるから優先席があるわけである。横浜の市営地下鉄や阪急電車も以前は全席優先席にしていた。要するに、優先席を決めれば、他の席は優先しなくて良いになってしまうのはおかしいと判断したからである。ところが現実には、全部優先席だからどこでも譲るといったことなのに、かえって譲らなくなったというアンケート結果が出てきた。「これはどうして起こるのか」ということを、問いかけて番組は終わっている。この回は、学校で結構議論になったりしていると聞くので、そういう意味では、「教

材として成功したのかな」と思う。

制作のねらいと表裏一体だが、苦勞としては、一つの内容項目に対して、一つの番組が成り立っていないことを少しでも工夫してカバーすることである。「この内容項目に対してこの番組があります」というのがこれまでの教科番組であり、他の教科を含めて多くがそのような番組内容になっている。理科の「花の成長」を勉強するには、この番組とこの番組とこの番組を観てもらえればわかります、というふうになっている。しかし『道徳ドキュメント』ではそれ自体が成立しないので、いろいろな要素を含んでいることを示す「放送リスト&内容項目対照表」を作った。それぞれの番組に対して、どの道徳の内容項目に関連があるのかを3、4個ずつマークをつけており、先生が教えたい道徳の内容項目を、そこから探していくことができるようになってきている。逆に言うと、一つの番組にはこれだけの要素が含まれている可能性があり、これがドキュメンタリーの良いところでもあり悪いところでもあると思う。

そのような例として、『「ちがう」ことを「ふつう」に」という回を取り上げる。この回は、「顔に大きなアザがあるためいじめられた中谷さんは、人目を避けるように暮らしてきた。しかし、ある出会いから積極的に人と関わりながら生きていこうと決意する」という内容で、人権教育の枠組みでも教材としてよく使われている。道徳の内容項目からすると、「1 - (2) 理想・努力・勇気・希望・不撓不屈」に合う面と、「4 - (2) 公平・公正・正義」にも該当すると「対照表」では示している。両方に使えるということによってどういうことが起きるかということ、先生は「1 - (2)」を教えようとして観させても、番組を観た子どもが「4 - (2)」的なことを言い出す可能性があるということである。私たちはいろいろな意見が出るのがねら

いであり、そういう意味では良いのだが、先生方からすると「1 - (2)」と「4 - (2)」という違った次元での議論が出てなかなか使いづらいという評価になりがちである。また、良い教材ではあるが、子どもの意見が思ってもみないところになってしまう危険性があったり、意外なところに執着したり、主人公ではなく違う人に注目したりすることがあり、それらを先生がうまくさばけるかどうかという課題はある。この点で、当然ではあるが、番組の教育的価値を高められるかどうかは、授業を進行する先生の技量や深みにかなり拠っていると言える。子どもたちがねらいと違うことを言い出した時にどううまく収束させるか。押さえ込むのではなく、話が良い落ちどころに向かっていくようにしたり、発散したら「もうちょっと考えていこうよ」というふうに発展させていったりするのは、先生の技量にかなり任せている部分が多く、先生に負荷がかかってしまうとは感じている。

少しでも使いやすくしようと、『道徳ドキュメント』の各回の内容を、「人生はチャレンジだ」「キミならどうする?」「人とつながる」という三つの種類に分けている。

「人とつながる」は、一般的にはコミュニケーションの重要性を示している。「ぼくの国 わたしの国」は少し違う面があるが、多くの人とつながることで一人ではできないこともできるということ、そして世の中にはいろいろな人がいるということを知ってもらうという意味で、「人とつながる」という位置づけの一つとして括っている。

「人生はチャレンジだ」は、個人に注目して、さまざまな挑戦をしている方を取り上げている。例えば、京都の女子プロ野球チームで主軸を打っている梅さんを取り上げた「プロを夢みた野球少女」という回がある。彼女はずっと

野球が好きで、高校も野球部に入りたいと希望しさんざん苦勞して野球部に入ったが、高野連（日本高等学校野球連盟）の規定で公式戦には出ることができなかったが、それでも夢をあきらめきれず、女子プロ野球ができた時にすぐテストを受けて入団できたという、一種のサクセスストーリーである。この回の内容は、非常に評判が良かった。

「キミならどうする?」は、オープンエンドの内容で、大人でも判断に困るような問題を扱って、「キミならどうする?」というふうに最後に問いかけるものである。その問いかけを受けて、できればクラスで議論をしてもらえればと思っている。例えば、さきほどの「不法投棄」をテーマにした回や、下北半島の野生の猿の「処分」をめぐる葛藤を描いた回（「サルも人も愛した写真家」）は、そうした内容構成になっている。後者は、「下北半島に野生の猿がいて、その猿があまりにも畑を荒らすので、村人が取り締まろうとするが、天然記念物に指定されていることもあり、全部殺すわけにもいかない。そこで繁殖しないように、若いメスの猿だけ殺すことになった。ただ、普通の村人では、メスカオスカわからないし、ましてや年齢も分からないので、猿が大好きでその村に住んでずっと写真を撮っている写真家にその判断をしてほしいと頼むことになった。その写真家は猿を殺してほしくないが、農作物の半分以上を食べられたりするので駆除も致し方ないとも考える。さらに協力しないと殺さなくていい猿まで全部殺されかねないため、葛藤の中で最終的には協力する」という内容の回である。場合によっては、写真家の決断前に番組を切ってしまうと議論をすることで、さらに議論が盛り上がったこともある。

全体を通じた制作上の留意点としては、テレビは制約が多い面があるが、できるだけテレビ

の魅力が発揮できる内容にすることだと考えている。読み物教材と違ってテレビが得意なところは、音楽が入っていて、直接映像で本人が話すとか、その表情が見えるという点で、見ている人の気持ちを動かすことができる場所だと思う。したがって、取材対象もそうしたテレビの特徴が生かすことのできる人をできるだけ選んでいる。心が動いたとすると、子どもたちはやっぱり心がざわつくので、自分の意見を言いたくなったり、そのときは言わなくても家に帰ってから親に言ったりとか、もう一回観たりとかしやすいと思う。「継続して授業で使っていくと、子どもが自分の意見を言うようになった」という先生の反響もあり、子どもたちの気持ちに届いているのかなと感じている。

もう一つ、この番組で大事にしたいと考えている点は、人の生き様を見せたいということである。学校現場で子どもたちと接してみて、最近、特に感じることは、子ども自身の自己肯定感が弱まっているということである。例えば、夢とか将来なりたいことを聞くと、昔だと「宇宙飛行士」や「サッカー選手」、「プロ野球選手」といった、なれそうにもない大きな夢が出てくることもあったが、今多いのは「保育士」とか、場合によっては「将来の夢はない」といった返答である。また、自分の将来を明るく話すとか、「毎日が楽しい」みたいな感じの子どもが少なく、自己肯定感が弱まっていると強く感じている。そこで、いろいろな人間が世の中に生きていて、さまざまな悩みを持ちながらも、頑張っていたり、たまにはくじけても思い直したりやり直して生きているし、「それでいいんだ」ということを、人の生き様を通じて伝えたいと思っている。

その例として、2011年に制作した番組の中では、被災地を舞台にした回が二本ある。その一つの「心をつなぐ写真」は、被災して何もかも

なくした人のポートレートが無償で作る写真家を取り上げた。その写真家は、「各自の好きな格好で良いから記念写真を撮ろう。その代わりに笑って撮ろうよ」といろいろ話をしながら、その人の一番良い表情を撮って額に入れて贈るという活動をしている方である。それ自体は単純な作業ではあるが、いろいろな人が涙ながらにその写真を受け取ったり、その人の人生や、失くしたいろいろなものが見えてくる。さまざまな状況でいろいろな人間が生きているということが、被災地ではよく見えるのである。もう一つの「ふるさとの絆をもう一度」は、被災地の地域運動会が中止になってしまったが、残った人たちだけで運動会を再開しようという物語である。「さまざまな人がいろいろな思いを抱えて今の日本で生きている」という「人の生き様」をできるだけ見せたいと思って番組を作っている。今の子どもたちはネットを通じて色々な情報は割と多く持っている一方で、直接的な人づき合いをあまりしなくなってきている。番組をきっかけに、他人への興味が湧いてきて人とつながり、少しでも自己肯定感へとつながっていければという願いがある。

3 学校現場の反応

学校現場の反応は、一部の先生の反応はとても良いが、多忙さと力量の関係もあり、多くの先生の反応は「使いにくい」「難しい」というものである。実際に子どもたちの反応が読めず、うまく使いこなせるかどうか不安であるという声がある。それなら誰が読んでも、「絶対友情以外のことをいう子どもはいない」と思われるような読みもの教材を使って、問題設定するという授業のほうが安心できると、正直に言う先生もいた。また、道徳の年間指導計画を前年度に学校長に提出しなければならず、テレビ番組

を使う時にはどういう番組を使うかを記入しなければならないが、その時点で番組の計画ができていないとそれが記入できず、「使いたくても使えない」という声もある。

しかし、一部の先生はこれを使いこなして共感していただき、「ぜひ毎年最低4本は作り直して、その年の話題を入れてほしい」と言われる。教科番組では、同じ内容を5年間放映していたりする場合もあるが、ドラマであれば観る子どもが変わるからそれでも良いかもしれない。しかし、ドキュメンタリー教材として、『道徳ドキュメント』を使っている先生からすれば、「古い話題ではなく、まさに今起きている問題を扱ってほしい」「5年間、同じ内容ではリアリティがなくなってしまう」ということになる。それも一つの大きな課題である。

4 今後の課題

今後の課題としては、取材対象の問題がある。やはり5・6年生、中学生が15分でわかる内容で、かついろいろな人間や問題が見えてくる素材（テーマ）選びが難しい。以前、「消費税導入のことをやりましょうか」という提案をしたが、番組の指導案を担当している土田雄一先生に反対された。「子どもは数字をすごく喜ぶから、消費税率10%、15%、20%といった数字の話ばかりになってしまう。しかし、『そもそも人間は行政の公共福祉に頼ってしまっているのか』『個人の頑張りをもっと大事なのか』、あるいは『人間同士がもっと社会的に助け合える仕組みが大事なのか』という話には、なかなかならないのではないか」という理由だった。

いじめ問題を取り上げようという案もあったが、どうしても匿名になってしまうし、個人情報保護のためモザイクを入れる必要もあり、意図しているドキュメンタリーではなくなってし

まうということで、その案も結局は却下となった。そこで、いじめ問題にもつながっていくと良いなという思いで作った『『ちがう』ことを『ふつう』に』という回がある。この回を観て、顔にアザがある中谷さんの気持ちになって考えると、いじめ問題というよりは、周りの偏見に負けず頑張っ生きていく「不撓不屈」に焦点を当てた授業としても成り立つ。また、もう少し俯瞰してみると、「見た目でも人を傷つけたり、差別してはいけない」という話に落ちつくこともある。実際にいろいろな発言が出てくる授業になると、その両方が出たりもする。さらには、彼を産んだ「お母さんも本当に辛かっただろうな」という、母親の気持ちに立つ子どもも出てきたりする。うまくまとまれば、さまざまな意味やいろいろな見方が世の中にはあるというふうになるのではないか。

そういう意味で、番組作りの際におさえておきたいことは、子どもたちはすごく「現実自分たちがリンクしている」という意識が高くなってきているということである。中学生ぐらいになると、ネット犯罪等が身近に存在しているので、「こういうことをしてはダメだ」ということをどうしてもやらなければいけなくなってきているが、逆に良いところも早めに教えておかないといけないのではないか。「こういうものにアクセスしてはダメ」「こういう人を信じてはダメ」「こういうことはこういう悪い世界に入っていくからダメ」といったように、どうしてもリスク管理上のことばかりを先にやりがちであるが、その先には自己肯定感が生まれない。逆に世の中にはそういうことを超えて良いことや良い人がいるという事実を、少なくとも同時並行的に知った方が良い。それは、100年も200年も前の人ではなく、今、同じ状況に生きて、さまざまな悩みや困難に打ち勝っている人、克服できなくても頑張っている人、同じ

悩みで悩んでいる人がいるということを伝えることが大事であろう。このことこそが『道徳ドキュメント』の特徴であり、良さと思っている。

参照

NHK『道徳ドキュメント』HP

<http://www.nhk.or.jp/doutoku/documentary/>